

これからの多文化保育

かわむら まきこ

河村 槇子さん (NPO法人多文化共生リソースセンター東海 副代表理事)

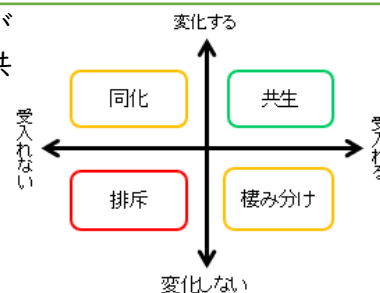


新型コロナウイルス感染拡大の影響により、中止や変更を余儀なくされた本年度の人権保育専門講座ですが、講座4については、皆様のご理解とご協力のもと、開催することができました。講座4では、NPO法人多文化共生リソースセンター東海の河村槇子さんに「これからの多文化保育」と題してご講演をいただきました。

1 多文化保育のあり方について

◇「多文化共生」とは、国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら地域社会の構成員として共に生きていくこと。

共 生：相手のことを受け入れながら、自らも変化させる。
棲み分け：相手のことを受け入れるが、自らを変化させない。
同 化：相手のことを受け入れないが、自らを変化させる。
排 斥：相手のことを受け入れないし、自らを変化させない。



◇日本の保育所に入所した外国につながる子どもに対して、「棲み分け」や「同化」「排斥」ではなく、「共生」をめざした保育が大切です。異なる文化をもつ人とのかかわりを深めていくことは、子どもだけでなく保育者等にとっても重要であり、多文化共生の保育を子どもや保育者とともに実践していく必要があります。

2 生きづらさを抱えている外国につながる子どもと保護者（3つの壁）

- ①ことばの壁 ・人とのコミュニケーションが取れず、人間関係がうまくいかない。
・情報がうまく得られず、不安になったり、危険に遭遇したりする。
・勉強についていくことができず、学力の低下につながることもある。
- ②制度の壁 ・在留資格や国籍による制限を受け、就きたい仕事につけない。
・在留資格によって、日本にいられなくなることがある。
- ③心の壁 ・見ためや偏見によって差別を受ける。
・考え方や価値観の違いから誤解が生じ、トラブルやいじめにつながる。



◇「このまま体の全部の皮がめくれたら、私の肌は日本人と同じ色になれるかな…」これは、肌の色が茶褐色の外国につながる幼い子どもの言葉です。日焼けをして皮がめくれた腕を親に見せながら、「日本人のようになりたい」と願う気持ちを伝えています。私たちは、小さな子どもがこのような言葉を言わなくてもよいように、外国につながる子どもたちが、言語や文化、生活習慣、価値観などを周りから認められ、自らのルーツや生き立ち、家族を肯定的にとらえることができるよう、取組を進める必要があります。

3 ケーススタディ

Q 「1歳児クラスのS君は外国出身。1歳児クラスでは、一人で食べる力を育てるため、食べ物を上手に口に運ぶなくても、子どもが自分で食べることを尊重して保育を行っている。顔にご飯粒を付けながら食事をしているS君を見た保護者が怒っているとのこと。保護者は何を怒っているのでしょうか。保護者と保育者との間でどのような「子育て観」の違いがあったのでしょうか」

A 「保護者は、子どもが食事で汚くなってしまっており、可哀想だと思っています。外国の中には幼児になっても親が食事を食べさせる習慣があるところもあり、1人で食べさせることが理解できません」

◇自分にとっての当たり前が、相手にとっての当たり前ではないことを常に意識して保育を行う必要があります。子どもたちの行動の背景を捉えるためには、日頃から保護者とかがかわることが重要です。

【参加者のアンケートより】

- 外国と日本との文化の違いが原因で、保護者と思いがすれ違うことがあることを知った。言葉だけではなく食事などの違いを理解し、様々な問題（壁）を乗り越える必要があることが分かった。
- ケーススタディによって、保育者は、価値観や習慣、宗教の違いがあるということの理解を深めることができた。コミュニケーションを積極的にとってお互いの文化を知ることが大切だと思った。